

---

# 天使の笛

りき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使の笛

### 【NZコード】

N6462C

### 【作者名】

りき

### 【あらすじ】

人との付き合いがうまくいかないOーしの主人公。ある日、昼休みに聞こえてきた笛の音を辿つてその主を探しに行くが……。不思議だけど不思議じゃない。そんな出会いが、きっかけになります。

社会人になつて二ヶ月。

私はうまく周りの人と交わることが、まだできない。

仕事で関わることはなんてことないのに、プライベートになると、途端に萎縮してしまつ。

ランチを一緒に食べに行こうと言つてくれた同期もいたが、お弁当を持つてきてしまつっていたので断つてしまつた。

今考えれば、お弁当なんて家に持つて帰つてでも、一緒に行つてれば、もっと打ち解けられていたんぢやないか、つて思つ。思つは思つけど、もつ誘われることが無くなつてしまつた今は、どうしようもない。

それ以来、無愛想だと思われたのか、敬遠されているのが自分でわかる。

良く言えば不器用、悪く言えば要領悪い。

「はあ……」

溜め息だつて出る。

今日も一人でお昼。

一人だと、美味しいも何も感じない。ただ、おなかに物を入れるだけの作業のようで、楽しくもなんとも無い。ふとガラス窓のむこうの景色を見る。いい天氣だ。気持ちが良さそつ。

急にひらめいた。

屋上に行こう。

そう決めた。

屋上があることは知つていたが、イメージしていたものとはだい

ぶ違つた。

雨風にさらされ続けて風化を始めているよつたコンクリート。むき出しになつて、暑苦しい風を送り出している空調の排気口。むび付いたグレーの柵。

せめてベンチの一つでもあればいいものだが、それすらもない。  
やつぱり戻ろうかな。

もう思つたときだつた。

どこから聞こえる、笛の音色。

柔らかく、高音で、どこか遠くの国の音楽みたいな、澄んだ音。

何？ どつから？

あたりを見回してみる。

ここじゃない。

この辺りには、同じような企業の中型ビルがいくつもある。あつと/orのどれかの屋上だらう。

どこ？

私はどうしても気になつた。

聞いたことのないようなこの音色。

どんな人が？

それから私は、毎日の毎休み、心当たりのビルの屋上に登つて、  
その音の主を探し始めた。

近場から行つてみてはみたが、なかなか見つけられない。  
しかし、その音色は、毎日聞こえてきていた。

そして、とうとう最後の一つまで探し続けた。

近所では一番高いビル。ここがないなら、もつ探す術はないと思つていた。

今日はまだ笛の音は聞こえてきていない。時間からすれば、そろだらう。

覚悟を決めて、そのビルの屋上へと足を進めた。

なかなか立派な綺麗なビルだったのだが、やはり多くと同じく、屋上には手入れをしていないようだった。

くたびれた感じの人工芝には、ゴミや吸殻があり、所々がめくれ上がっている。

極めつけには、その隅で胡坐をかけて、弁当をかづくらつている中年太りのおじさんがいたりする。

イメージとは違うその風景に、一気に夢がしほんでいく。

毎日その事ばかりを考えて探しているうちに、その綺麗な音色に合わせた風景と人物を自分で作り上げてしまつていたのだ。

きっと、綺麗な花壇のある小さな屋上で、何かのわけがあつて、毎日その場所で笛の練習をする少年。まるで天使のような風貌で、その音を聞く人々全てを幸せにしていくような、不思議な力を持っているんだわ。

しかし、もう探しに行く場所もないし、手がかりだつてない。噂で有名だつとしても、その話を聞けるような友人は、元々居ない。

もう見つけることは出来ないのかな。一言、素敵な笛の音ですね、といいたかつたのだけだ。

肩を落とし、その場から立ち去りしだと、こつもの音色が耳を掠める。

ここにはこの辺りで一番高いビル。ここから見下せば、見つけられるかも。

戻りかけた足を、また屋上へと向けたその時。

「嘘……」

そこには、小さな笛のようなものを口元へあてた、さつきの中年のおじさんの姿があつた。

まさに、目の前で奏でられているその音色は、おじさんから発せられていた。

歳は四十代。今流行りのメタボリックな体型に、ずいぶん広いお

で」。電車で隣同士になつたら、ちよつと離れたくなつた瞬間に、おじさん。

「どこが天使のような少年よ。

勝手な妄想との相違に腹を立て、私は改めてそこから出でていつとある。

「つるさかつたですか？」

見つかってしまった。

そのまま無視してしまおうかと思つたが、しぶしぶ振り返る。

「いえ……そんなことは」

そのおじさんは、後頭部に手を当て、そうですか、と照れてみせる。

私がそそくさと建物へ入るドアに手をかけたとき、おじさんは言った。

「あの……良かつたら、聞いていてくれませんか」

え、とまた振り返る。

「一人より、一人の方が楽しいじゃないですか」

いつもなら、ここで適当な理由をつけて断るはずだ。なのに、私はまた後悔するんじやないかって思った。もういつもと同じような後悔はしたくないって。自分でもわからないが、その時はそう思つたのだ。

「お昼休み、終わるまでなら……」

おじさんはとても優しい笑顔で喜んだ。

それ以上、私もおじさんも話はしなかった。

なんでここで笛を吹いているのかも、その笛はなんといつ楽器なのかも、おじさんは誰なのかも。

ただ、おじさんの奏でる笛の音を、風にふんわりと撫でられながら静かに聴いていた。

おじさんに誘われて、ここまで来て良かつた。ここで一緒に聴けて、良かつた。

とても、優しい昼休み。自然に目を瞑つてその時間に耽つていつた。

それ日以来、笛の音は聞こえなくなつた。

それでも、昼休みになると私はよく思い出す。

あの時間。あの気持ち。

あのおじさんのお陰で、私は少しだけ自分を好きになつた。

自分から飛込む勇気、自分から掴む幸せ。

そんな大袈裟なことではないのかもしれないけれど、そのお陰で、あんなに素敵な時間に出会えたのだから。

「ねえ、今からみんなでランチに行くんだけど、四人組でいくと、そこのお店デザートサービスなの。今三人なんだけど、ねえ、今日お弁当？一緒にいかない？」

私はちらつと、自分のカバンのふくらみを意識する。

でも、私は知つている。

もう、方法を知つている。

私はあのおじさんの真似をして、笑つて見せた。

「ううん。今日はたまたまお弁当わすれちゃつたの。一緒にいい？」

一人より二人がいいね、おじさん。一人よりみんながいいね、おじさん。

おじさんは、私にとつては、幸せを教えてくれた天使かもね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6462c/>

---

天使の笛

2010年10月8日15時54分発行